

本居宣長『てにをは紐鏡』のレトリック

松 繁 弘 之*

1. はじめに

通説において、本居宣長『てにをは紐鏡』（以下、紐鏡）は係り結びの研究の集大成としての地位が与えられてゐる。また、『詞の玉緒』（以下、玉緒）は紐鏡を解説したものとして考へられてゐる。

しかしながら、管見の限り「紐鏡がどのような図表であり、どのように見る図表であるか」については統一的な解釈がなされてゐない。あるいは「紐鏡とは何か」といふ基本的な問題が未解決であるといふこともできよう。

その問題を解決するためには従来のように単に文法的な観点からの解釈では不十分であると思はれる。紐鏡にしても、玉緒にしても、書名にレトリックが用ゐられてゐるのであるから、修辭的な観点からの解釈が必要であらう。たとへば、「林檎も木から落ちる。」といふ文と「猿も木から落ちる。」といふ諺とでは解釈の仕方が異なる。なぜなら諺は、林檎が引力に従つて落下するのと同じやうに、猿も引力に従つて落下することを意味しようと意図してゐるのではないからである。

本稿はできるかぎり修辭的な意味を解釈して、従来とは異なる図表の見方についての統一的解釈を提示する。（引用に際し表記を改めた場合がある。また引用の開始頁を示す。）

2. 紐鏡の紹介

紐鏡は「上のてにをは」と「下のむすび辞」との対応を図表化したものである。上のてにをはは次のやうに三つに類別されてゐる。

右行：は、も、徒

中行：ぞ、の、や、何

左行：こそ

*中部大学非常勤講師—日本語日本文化

また、下のむすび辞は四十三段に区分され、その四十三段は次のやうに六つに類別されてゐる。

第一類：第 1－5 段

第二類：第 6 段

第三類：第 7－18 段

第四類：第 19－32 段

第五類：第 33－38 段

第六類：第 39－43 段

そして、紐鏡の最上部には次のやうな歌が題名として掲げられてゐる。

てらしみよ本末むすふ ひも鏡 三くさにうつるちゝの言葉を

以下、この歌を手掛かりにして、「紐鏡」「紐」「鏡」を中心にその修辭的意味を考へる。

3. 解釈

3.1. 「紐鏡」のレトリック

「紐鏡」とは一方では字義的にいへば、「紐の付いた鏡」のことである。たとへば、中田祝夫編（1986）に次のやうに記述されてゐる。

「【一】〔名〕ひものついた鏡。

【二】〔枕〕（紐鏡の紐を解くなという意味の「なとき」から「のとか」の音に通わせる）

「能登香（のとか）」にかかる。」971

これは、図表のデザインそのものの見立てとして考へられる。なぜなら、図表の上部をよく見ると、〔徒〕〔何〕〔こそ〕と下の四十三段の表との間に紐が描かれてゐるからである。これは紐鏡の別ヴァージョンとして存在する『夕のおひ風』（大野晋編（1970）の口絵参照）と比較すると明かである。

他方では、図表のデザインが縦の方向に細長いことから考へれば、紐鏡とは「紐の形をした鏡、紐状の鏡」であるといふ見立てでも成り立つといへる。

3.2. 「紐」のレトリック

3.2.1. 「紐」と「むすぶ」

題名の歌において、紐は「本末むすふ ひも」として規定されてゐる。本末を結ぶことには三つの意味がある。第一に、言葉の本末を結ぶことである。この場合、本は「上のてにをは」であり、末は「下の結辞」である。玉緒には、

「てにをは。神代よりおのづから萬のことばにそなはりて。その本末をかなへあはするさだまりなん有て。」17

とある。したがって、本末を結ぶことは所謂係り結びの譬へである。

第二に、時代の本末を結ぶことである。この場合、本は「神代」「あがれる世」「いにしへ」であり、末は「世くだりて」の時代、即ち江戸時代である。玉緒に、

「あがれる世はさらにもいはず。中昔のほどまでも。おのづからよくとゝのひて。たがへるふしはをさゝなかりけるを。世くだりては。歌にもさらぬ詞にも。このとゝのへをあやまりて。本末もてひがむるたぐひのみおほかるゆゑに。」17

「てにをはのとゝのへは。その本末をかなへあはせて。いにしへのさだまりをあやまたぬをなんむねとはすめれば。おのれさきに紐鏡といふものを作り出て。」18

とある。

第三に、歌の本末を結ぶことである。この場合、本は上の句であり、末は下の句である。なぜなら、題名の歌の言語形式そのものを前景化させて歌の本末をみると、歌の中の「ひも鏡」が上の句と下の句とを意味的に結び付けてゐるといへるからである。

上の句

下の句

てらしみよ本末むすふ ひも鏡

三くさにうつるちちの言葉を

3.2.2. 「紐」の展開

さて、「紐」はさらなる修辭的イメージを引き出してゐる。第一に、宣長は玉緒の「言葉の玉のをの序」において、

「さるはいとかぎりなくめでたき物のかぎりならむにも。ぬきつらねたらんさまにしたがひてなむ。いま一きはの光もそはりぬべく。またはえなくきえても見えぬべければ。此緒こそげにいと名のめなるまじき物には有けれ。ましてすぢなくみだれもし。絶もしなむには。いかにめでたく共。そのかぎりいたづらならじやは。ことの葉の玉のよそひはた。此ぬきつらぬるてにをはからなん。ともかくもあんめるわぎなれば。又よそへてなむ。」8

と述べてゐる。紐は類似した形状のものである「緒」に置き換えられてゐる。

第二に、玉緒本文において、

「てにをはのとゝのへは。その本末をかなへあはせて。いにしへのさだまりをあやまたぬをなんむねとはすめれば。おのれさきに紐鏡といふものを作り出て。三條の大綱を張りわたして。此さだまりのかぎりをあらはしたりき。」18

と述べてゐる。このやうに、紐が「三條の大綱」として譬へられてゐる。したがって、「大綱」は紐の譬への譬へであるといへる。また、この「大綱」は懸詞としても考へることができ。それは一方ではロープを意味すると共に、他方では大綱（大要、大筋）をも意味してゐる。なぜなら宣長が「大綱」を「大むね」と述べてゐるからである。

「この三條の大づなをだにとり得てば。むすぼゝれたらんちゞのてにをはも。すぢゝゝ
おのづからさはらかにとけわかれて。つゆのみだれもなからむかし。」18

「紐鏡の三條の大綱とは。右〔は〕〔も〕〔徒〕【徒とは〈は〉〈も〉〈ぞ〉〈の〉〈や〉〈何〉
〈こそ〉などいふ辞のなきを今かりにかくいふ也。】の結び一條。中〔ぞ〕〔の〕〔や〕〔何〕
【〈いかに〉〈いく〉〈たれ〉の類みな同じ。】の結び一條。左〔こそ〕の結び一條。此三
條にして。これなんてにをはの大旨なりける。」18

第三に、紐を数へる場合の呼称は、紐一條、あるいは紐一筋、あるいは紐一本であるが、特に條の呼称は平安京の道路（一條大路、二條大路）を例に考へると明かなやうに、道を数へる場合にも用ゐられる。かうして、三條の大綱はさらに道に譬へることが可能となる。この譬へは次のパラフレーズに用ゐられてゐる。

「いにしへのよき歌どものは。かならずしからではえあらぬ。おのづからのことわりありて。定まりつる物になん有ければ。かりそめにもそれをはなれて。わたくしのさかしらをば。露ばかりもくはふべきにあらず。たゞいづくまでもゝゝ。ふるき道をたづねて。そのあとになんしたがひよるべきわざなりける。」18

「又〔は〕【〈も〉〈徒〉同じ。】といへば〔ぬ〕〔つ〕〔る〕と結び。〔ぞ〕【〈の〉〈や〉〈何〉同じ。】といへば〔ぬる〕〔つる〕〔るゝ〕と結ぶ言あり。此たぐひのけぢめなどをば。後の世の人は。をさゝゝわきまへしらぬにや。皆ひとつにまがへ誤ること。つねにおほし。【此差別は次々に委くいふがごとし。】すべてこれらのけぢめも。かの大綱の三條のすぢゝゝをたづねて。わきまへしるべし。」19

即ち、「ふるき道をたづね」ることは取りも直さず「大綱の三條のすぢゝゝをたづね」ることとなるからである。

以上をまとめると次のやうに図解することができる。

係り結び→紐→大綱→道

↓

緒

3.3. 「鏡」のレトリック

3.3.1. 「鏡」と「てらしみよ」

題歌「てらしみよ本末むすぶ ひも鏡 三くさにうつるちゝの言葉を」の「てらしみよ」について解釈しなくてはならない。そこで、何と何を「てらしみ」るのかを考へる。第一に、「本末むすぶひも鏡」に「三くさにうつるちゝの言葉」をてらしみることであるといへる。これは規則（格）と実例（ちゝの詞）との関係であり、規則と実例を照合することである。

第二に、本と末をてらしみる、即ち、本（上のてにをは）と末（下のてにをは）とをてらしみることであるといへる。宣長は玉緒において次のやうに述べてゐる。

「そのゆゑは。かのからぶみの助字といふなる物は。その本と末とをあひてらして。かなへあはするさだまりはなきものなるを。てにをはは。たしかに此さだまりのあと有て。」¹⁷

これは規則（格）の内容（係り結び）のことであり、所謂係助詞と活用形とを照応（呼応）させることである。

第三に、紐鏡と玉緒をてらしめることであるといへる。

「てにをはのとゝのへは。その本末をかなへあはせて。いにしへのさだまりをあやまたぬをなんむねとはすめれば。おのれさきに紐鏡といふものを作り出て。三條の大綱を張りわたして。此さだまりのかぎりをあらはしたりき。そはやがて此書の目録のやうにて。てにをはの大むねにしあれば。此ふみを考へんには。つねにかのひも鏡をかたはらにひろげおきて。あひてらし見べきなり。」¹⁸

これは紐鏡と玉緒との関係のことであり、紐鏡と玉緒をたがひに参照することである。

3.3.2. 「鏡」と「うつる」

まず、鏡は懸詞と考へることができる。即ち、一方では物を映すものであり、他方では鑑（手本、規範）でもある。紐鏡が規範であることは、紐鏡の本文に、

「此書は上のてにをはに従ひて けりける けれ あるは らんらめなどやうに留りもうごくかぎりをあげて其定れる格をさとさんと也」

とあり、また、玉緒において

「てにをはは。神代よりおのづから萬のことばにそなはりて。その本末をかなへあはするさだまりなん有りて。」¹⁷

とあるやうに、「定れる格」「さだまり」と述べてゐることから明かである。

次に、鏡の縁語である「うつる」に注目する。これもまた懸詞になつてゐると考へられる。第一に、紐鏡に「うつる」とは、紐鏡の図表に映つてゐる、即ち図表中に記載されてゐるといふことである。

第二に、「うつる」といふのは、題名の歌「てらしみよ本末むすふひも鏡 三くさにうつるちちの言葉を」にあるやうに、鏡は「三くさにうつる」言葉を映してゐる。この場合、「うつる」は活用を譬へてゐるのである。宣長は、玉緒において次のやうに述べてゐる。

「かの大綱の三條の段々の。三転おほづな みすぢ みうつり ことばごとの辞毎に。【三転とは。上のてにをはにひかれて。一ツ言の。三くさにうつりかはるをいふ也。〈けり〉〈ける〉〈けれ〉〈なり〉〈なる〉〈なれ〉などの如し。すべて此所の中に三転といふは。皆此意也。】」²¹

ここで「三転」とあるやうに、四十三の各段を横から見るのである。したがつて、転らないもの（活用しないもの）は紐鏡の図表には映つてゐないのである。これは、紐鏡の本文に、

「此書は上のてにをはに従ひて けりける けれ あるは らんらめ ^{トマ}などやうに留りもうごくかぎりをあげて其定れる格をさとさんと也 そは留りのみならず詞のきるゝ所は

いづくにてもみな同じ格ぞ さて此外に かな つゝ まし らし のたぐひのうごかぬ辞はしるさず されどそれも定れる格は有也」

とあり、また、玉緒にも、

「○三転の外 是ははたらかぬ辞にて。上の四十三段の辞のごとくに。三つにも二つにも^{うつ}転ることなし。故にひも鏡の外なり。」⁵⁴

とあるやうに、活用しない辞は紐鏡には記載されてゐないのである。

したがって第三に、宣長は「定れる格」を、

三転：紐鏡第 1 — 32 段

二転：紐鏡第 33 — 43 段

一転：紐鏡の外

といふやうに、三転から一転へと「移」して配列してゐるといへる。

3.3.3. 活用と「言語の妙」

宣長は紐鏡第 1 段から第 5 段まで、即ち、

：左行　：中行　：右行　：

1：　けれ：　き：　し：

2：しけれ：しき：　し：

3：しか　：　し：　き：

4：□□　：にし：にき：

5：□□　：てし：てき：

について、次のやうに注を附してゐる。

「此五段のうち上二段は現在　下二段は過去にて　〈し〉と〈き〉と入かはる事　てにをはの肝要にて　言語の自然の妙なり」

また、同様に、玉緒においても、

「さてかの三條に分てあげたる段々の辞のさだまりのなかに。上を〔は〕【〈も〉〈徒〉同じ。】といへば〔けり〕とむすび。〔ぞ〕【〈の〉〈や〉〈何〉同じ。】といへば〔ける〕むすび。〔こそ〕といへば〔けれ〕と結ぶたぐひは。たれもよくわきまへしれゝども。〔は〕【〈も〉〈徒〉同じ。】といへば〔し〕と結び。〔ぞ〕【〈の〉〈や〉〈何〉同じ。】といへば〔き〕と結ぶと。又〔は〕【〈も〉〈徒〉同じ。】といへば〔き〕とむすび。〔ぞ〕【〈の〉〈や〉〈何〉同じ。】といへば〔し〕と結ぶと。詞によりて。かくかへさまにもなるなどは。後の世の人はまゝ誤ることあり。【是は紐鏡はじめ五段の内。上二段は。右のくだり〈し〉にて結び。中のくだり〈き〉にて結ぶ格なるを。下三段は。うちかへして。右のくだり〈き〉。中のくだり〈し〉にて結ぶ。此所かくのごとく。〈し〉と〈き〉とたがひにかはる故に。初学の人はまだひやすし。よくわきまふべし。】」¹⁸

と述べてゐる。要するに、「初学の人はまだひやす」い紐鏡の「はじめ五段」は、「入かはり」か

へさまになる」といふ「てにをはの肝要にて言語の自然の妙」である。

ここで考へるべきは、「〈し〉と〈き〉と入かはる事」および「かくかへさまにもなる」といふ説明である。これを鏡と関連付けて解釈をする必要がある。例へば、自分の姿を鏡に映した場合を考へてみよう。鏡に映つた姿と自分の姿を比べてみると、左右が入れ替はつてゐることに気付く。当然といへば当然であるが、なほ不思議なことであると思はれる。

それと同じやうに、紐鏡の「はじめ五段」は所謂形容詞（現在を意味する）の上二段と所謂過去・完了の助動詞の下三段とでは〈し〉と〈き〉（右と左）とが入れ替はるのである。次のやうに図解できる。

	: 左行	: 中行	: 右行	:
1:	けれ:	き:	し:	
3:	しか	:	し:	き:

3.3.4. 自他と「言語の妙」

さて、宣長は紐鏡第24段—32段（上九段）と第33—38段（下六段）、即ち、

上九段	下六段
: 左行 : 中行 : 右行 :	: 左行 : 中行 : 右行 :
24: くれ: くる: く :	33: け : く :
25: すれ: する: す :	34: せ : す :
26: つれ: つる: る :	35: て : つ :
27: ぬれ: ぬる: ぬ :	36: へ : ふ :
28: ふれ: ふる: ふ :	37: め : む :
29: むれ: むる: む :	38: れ : る :
30: ゆれ: ゆる: ゆ :	
31: るれ: るる: る :	
32: うれ: うる: う :	

について、次のやうな注を附してゐる。

「此九段のうち詞の首に○をしるすは つかひやうによりて転ずる格のかはる詞也たとへば 解は^レ自解ルこゝろの時は「とく」「とくる」「とくれと留り 物ヲ解クこゝろの時は「とく」「とけと留る 続は^レ自続クこゝろの時は「つゞく」「つゞけ 物ヲ続クルこゝろの時は「つゞく」「つゞくる」「つゞくれと留る 立は^レ自立ツときは「たつ」「たて 物ヲ立ルときは「たつ」「たつる」「たつれと留る 添は^レ自添フときは「そふ」「そへ 物ヲ添ルときは「そふ」「そふる」「そふれと留る 頼は我ガ人ヲ頼ムこゝろの時は「たのむ」「たのめと留り 人我ヲシテ頼マ令ムルこゝろの時は「たのむ」「たのむる」「たのむれと留る也 すべてこれらのわきまへ有べし 猶くはしくは別にしるす」

「上九段の詞とこゝの六段の詞と其格混じやすし 此図を見て転用の差別ある事をよく考へてわきまふべき也」

この「つかひやうによりて転ずる格のかはる詞」に注意すべきである。自他の意味の違いによつて「転ずる格」が上九段（所謂二段活用）か下六段（所謂四段活用）かになるといふことである。したがつて、紐鏡に映る言葉は、活用によつて左右に「^{うつ}転り」、自他によつて上下に「移る」のである。

さらに、例に挙げられてゐる詞は次のやうに二類に区分することができる。

甲類：解

乙類：続、立、添、頼

その区別の根拠は甲類は自が上九段であり、

解：自ら解る：上九段

：物を解く：下六段

乙類は自が下六段であるからである。

続：自ら続く：下六段 立：自ら立つ：下六段 添：自ら添ふ：下六段

：物を続く：上九段 ：物を立る：上九段 ：物を添る：上九段

頼：我が人を 頼む ：下六段

：人が我をして頼ま令むる：上九段

このことは、玉緒において、紐鏡の「上九段」に、次の五段を加へて、

：左行：中行：右行：

19：ぬれ：ぬる：ぬ ：

20：つれ：つる：つ ：

21：為来得寝経 ：

22：すれ：する：す ：

23：るれ：るる：る ：

「上の十四段」となつてゐるが、同様であつて、

「さて又自他のかはりにて。此十四段の格と下の六段の格と。二様にわたる詞もある也。其例をいはば。解は。みづからとくるをいふ時は。「とく共」「とくる共いひて。此十四段の格なるを。他をとくをいふ時は。ただ「とくとのみいひて。」「とくるとはいはず。下の六段の格なり。砕はみづからくだくるには。「くだく共」「くだくる共いひて。此十四段の格。他をくだくには。「くだくといひて。」「くだくるとはいはず。下の六段の書くなり。折【をる をるゝ】闕【かく かくる】切【きる きるゝ】破【やぶる やぶるゝ】なども同じ。此類皆なずらへ知べし。又立は。みづからたつをいふ時は。只「たつとのみいひて、「たつるとはいはず。下の六段の格也。他をたつるには。「たつ共」「たつる共いひて。此十四段の格也。頼は。みづからたのむには。只「たのむといひて。」「たのむるとはいはず。下の六段の格也。他を「たのむるには。「たのむ共」「たのむる共い

ひて。此十四段の格也。続【つゞく つゞくる】入【いる いるる】沈【しづむ しづむる】添【そふ そふる】なども同じ。」227

と述べてゐる。ここでも例示の詞は次の二つの類に分けられてゐる。

甲類：解く，砕く，折る，闕く，切る，破るなど

乙類：立つ，頼む，続く，入る，沈む，添ふなど

甲類は，自が「上の十四段の格」であり，

解：みづからとくる：上の十四段の格

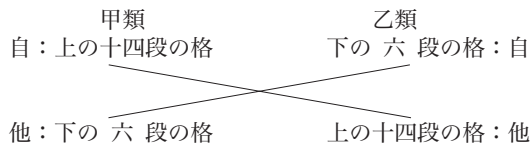
：他をとく 下：下の六段の格

乙類は，自が「下の六段の格」である。

立：みづからたつ：下の六段の格

：他をたつる 上：上の十四段の格

紐鏡では例示の詞の数が不均衡であつたが，ここでは均衡してをり，宣長がこの二つの類を対立した類として意図したと解釈することができる。さうすると，甲類と乙類とでは，自他によつて上下（転ずる格）が入れ替はるのである。ここにもまた宣長は言語の巧妙なメカニズムを発見してゐるといへる。図解すれば次のやうになる。



3.3.5. テンス・アスペクトと紐鏡

宣長の『玉あられ』（この書は玉緒を多く参照してをり，玉緒を補完するものである）の「詞に三つのいひざまある事」に，

「たとへば花に「さく」「さける」「さきし」，「ちる」「ちれる」「ちりし」，雪に「ふる」「ふれる」「ふりし」，鳥などに「なく」「なける」「なきし」などいふたぐひ，或は「あふ」「あへる」「あひし」，「思ふ」「思へる」「思ひし」，「たつ」「たてる」「たちし」などいふたぐひ，大かたいづれの言も，此三つのいひざまによりて，いさゝかその意も差別ありて，花に「さく」といふは，今咲こと，「さける」といふは，「咲たる」といふと同じことにて，咲てあること，「咲し」といふは，前に咲しことを，後にいふ詞也，大かたかくの如し，いづれの詞も是になずらへて，心得わくべし，」477

と述べてゐる。この「三つのいひざま」は所謂テンス・アスペクトの差別であるが，これは紐鏡に対応してをり，

例	意味	紐鏡
1：さく	：今咲くこと	（現在）：第32—38段
2：さける	：咲きてあること	（完了）：第13—18段

3：さきし：前に咲しこと （過去）：第 3 段

と整理することができる。実際、第 13—18 段（完了）には、

「此六段は第四の韻より り る れ とつゞきて留るなり 万葉に此類の詞をば有ノ
字をそへて 聞有^{キケリ} 成有^{ナセリ} 聞有^{タテリ} とやうに出たり」

と注を附してゐる。ここに挙げられてゐる例は、

第 33 段：きく 第 34 段：なす 第 35 段：たつ

といふやうに、第 32-38 段（現在）の中に映つて（記述されて）ゐる。また、第 3 段（過去）にも「聞き」が映つてゐる。したがつて、宣長は「三つのいひざま」を明確に意図してこれらの例を挙げてゐるといへよう。要するに、紐鏡に映る詞は自他と同様にテンス・アスペクトによつても上下に移動するといへる。

4. 考察

さて、以上のやうなレトリックがなぜ必要とされるのかを考へよう。一方では、その教育的役割が考へられる。宣長がレトリックをどのやうに考へてゐるかに注目すると、宣長は『玉勝間』『譬といふものゝ事』において次のやうに述べてゐる。

「たゞにいひては、ことゆきがたきこゝろも、萬の物のうへにたとへていへば、こともなくよく聞ゆること、多くあるわざ也、さればこのたとへといふ事、神代より有て、哥にも見え、今の世の人も、常にものすること也、」下 12

つまり、レトリックを用ゐることによつて理解や伝達が容易になると考へてゐる。したがつて宣長は、係り結びや活用といふ抽象的な概念を紐（係り結び）や鏡（活用、自他）として具象化することによつて、初学者にも容易に理解できるやうに意図したといふことができよう。実際、玉緒には、

「【…初学の人とはまどひやすし。よくわきまふべし。】」19

「いまだしき輩は。疑ひありぬべければ。今その心得を委くいふべし。」20

「うひまなびのともがらなどは。なほえさとりあきらめぬくまゝの。かならずあるまじきにもあらず。」21

などの、初学者に対する配慮がなされてゐるのである。

他方では、その理論的役割が考へられる。それはレトリックが「言語の自然の妙」を鮮明にすることに寄与してゐることである。宣長が日本語の語法をどのやうに考へてゐるかに注目すると、『漢字三音考』『皇国言語ノ事』において、

「凡テ如此ク。活用助辞ニ因テ。其義ノ細ニクハシク分ル、事甚妙ニシテ。外国ノ言語ノ能及^クズ所ニ非ズ。凡ソ天地ノ間ニ。カクバカリ言語ノ精微ナル国ハアラジトゾ思ハルヘ。」383

と述べ、日本語のメカニズムの「精微」さに驚嘆してゐる。このことが紐鏡および玉緒において具体的に提示されてゐるといふことができよう。また重要なことは、宣長が単に係り結びや活用や自他などが整然と規則的に為されることを指摘してゐるのではなく、その規則と規則との関連を「入かは」り「かへさまになる」といふ観点から捉へてゐることである。このためにこそ「鏡」のレトリックが必要となつたといへよう。

5. むすびに

以上によつて、紐鏡とは係り結び、活用、自他、テンス・アスペクトなどを結びつけたものであり、宣長の語法研究が実を結んだものであるといへよう。

本稿によつて紐鏡の曇りを拭ひ去り、もと居た紐鏡の見方と名のりする人よりも長く鮮明(闡明)な紐鏡を見ることができるやうになるであらう。

引用文献

- 大野 晋編 (1970)『本居宣長全集第五卷』筑摩書房
 村岡典嗣校訂 (1928)『玉勝間』(下) 岩波文庫
 ◇
 中田祝夫編 (1986)『新選 古語辞典 新版』(「常用」新版七刷) 小学館

参考文献

- 尾崎知光 (1983)『国語学史の基礎的研究』笠間書院
 島田昌彦 (1985)『国語における文の構造』風間書房
 中山緑朗 (1999)『動詞研究の系譜』明治書院
 古田東朔・築島裕 (1972)『国語学史』東京大学出版会
 本居記念館編 (2001)『本居宣長事典』東京堂出版
 渡辺英二 (1995)『春庭の語学研究』和泉書院
 ” (1997)『常昭の語学研究』和泉書院
 ◇
 尼ヶ崎彬 (1990)『ことばと身体』勁草書房
 ” (1994)『日本のレトリック』ちくま学術文庫
 池上嘉彦 (1978)『意味の世界』NHK ブックス
 ” (1992)『詩学と文化記号論』講談社学術文庫

◇

松繁弘之（2000）「本居宣長のてにをは論の原理」

『神戸市外国語大学研究科論集』第三号

松繁弘之（2004）「本居宣長『詞の玉緒』における活用論」

『神戸市外国語大学研究科論集』第七号

松繁弘之（2004）「本居宣長の語学研究と本居春庭『詞の八衢』との関係」

『中部大学文学部研究論集』第 11 号

（2006 年 10 月 4 日 受理）